

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所 属 保健医療学部リハビリテーション学科

名 前 田邊浩文

作成日 2025 年 5 月 1 日

1. 教育の責任

このポートフォリオを作成した田邊浩文(以下、作成者)は保健医療学部リハビリテーション学科作業療法専攻の教員として、以下の授業科目を担当している。各授業のシラバスは湘南医療大学 WEB ポータル上で本学学生並びに教職員に公開されている。

科目名	対象 学部 ・学年	必修 ・選択	開講年度、 前期・後期・通年	受講 者数	単位
見学実習(作業療法)	1	必須	1年次後期	40	1
地域リハビリテーション実習	3	必須	3年次前期	40	1
評価実習	3	必須	3年次後期	40	4
作業療法評価学総合演習	3	必須	3年次後期	40	1
日常生活支援論Ⅱ(各論)	2	必須	2年次後期	38	1
作業療法概論	1	必須	1年次前期	40	1
作業療法研究法	3	必須	3年次前期	40	1
作業療法研究法演習	3	必須	3年次後期	40	1
義肢装具学	3	選択	3年次後期	40	1
作業療法卒業研究	4	必須	4年次通年	31	1
チーム医療論	4	必須	4年次後期	31	1
総合臨床実習Ⅰ(作業療法)	4	必須	4年次前期	31	1
総合臨床実習Ⅱ(作業療法)	4	必須	4年次前期	31	1
作業療法学総合講義	4	必須	4年次後期	31	1
作業療法学総合講義	4	必須	4年次後期	31	1

この表に示す、作成者が担当する授業は、学部の全学年に関わり、身体機能障害領域の技能面、臨床実習での技能実践、研究指導に係る科目が多い。基礎医学で学んだ知識及びその知識を作業療法士として臨床的に応用する能力を育てることは重要であり、学生が臨床実習や就職時に高い臨床技能を備える必要がある点において自身の教員としての役割は重い。学生の中には、「科目立てた内容が作業療法の実践に、いかに関連付けられており、重要であるのかについて理解されていないこともあり、そのような学生に、基礎医学の知識を踏まえた作業療法評価過程の理解や臨床的横領能力とその知識や技能を臨床現場での実践にどのように生かされるのかについて、視覚的教材を活用した具体的な事例の説明や演習形式、展示説明等を通して伝える必要があると考える。

本学での授業の他に、以下のような活動を通して、学内・学外で得られた情報を教育活動に活かしている。

- 1) 大学内各種委員会(研究科管理運営委員会、研究科委員会、FD活動他)
- 2) 米国 Constraint-induced Movement Therapy リサーチグループメンバー

- 3) ポーランドヴツヂ医科大学およびポズナン医科大学共同研究員
- 4) 機関誌作業療法編集委員
- 5) 精華大学工学部共同研究員
- 6) 日本作業療法学会・神奈川県作業療法学会の演題査読委員
- 7) 各種研修・講習会講師(CIセラピーの講師等)
- 8) ベトナム・ハノイ医科大学共同研究活動
- 9) 間葉系幹細胞治療研究(アブエニューセルクリニック)

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

湘南医療大学は、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」を理念として掲げている。私は、この理念を準拠にして保健医療学を学問基盤として、保健・医療・福祉・教育を担当して社会へ奉仕できる人材育成をめざす。学生が具備すべきことは、やさしさと思いやりのある保健・医療・福祉・教育の実践者として対象者に命を全うし得るための支援ができる知識・技術の習得そしてその人らしさと個別性を尊重し敬愛する信念のもとに理念の実践者になり得ることであると考え。この学部ディプロマ・ポリシーは、「リハビリテーションの専門職として高度な知識と技術を身につけ、実践することができる。科学的根拠に基づき主体的に行動することにより問題解決に向けて実践することができる。相手を尊重し、他者とのコミュニケーションを通じて良好な関係を築いて発展させることができる。保健・医療・福祉・教育・産業等各界の関連職種と連携し、人々の健康に寄与することができる。幅広い教養と高い倫理観をもち、クライアント中心の医療を主体的に提供することにより地域社会に貢献することができる。卒業後も自己研鑽に努め、生涯にわたり自らの専門領域を実践し続けることができる。」を掲げており、知識と技術以外にもヒトとしての適切な倫理観そして対象者を全人的に捉えた支援の視点で診るための心の教育についての重視・真心の確立からの教育、または授業への取り組みが教員に課せられた重要な課題であると考え。

2) 理念をもつに至った背景

この理念に基づいた精神を学生に獲得させるためには、人を尊ぶ心、人の命を尊ぶ、そして個々の人格を尊重するとともに、自らも人格を形成して資質を高めるなど、人格育成をはじめ、理念を保健医療福祉現場で実践するために、豊かな教養に裏付けられ醸成された人間性を身につけることが不可欠であると考え。そして、作業療法士として実践が求められる多職種協働について本学において経験し、実践に必要な精神を育成させることにより、他者理解の上に多面的・多角的な思考力を身に付けることができるものと考えたので、この理念を持つに至った。

3. 教育の方法・戦略

このような理念・目的を実現するために、わたしが実践している教育方法について述べる。

(1) 基礎的知識と応用学的作業療法実践までを相互理解させる教育構成

解剖学、生理学、運動学、病理学などに関する知識と各種疾患学そして作業療法実践について、知識と技能を体系的に組み合わせて、医学と保険学、そして福祉学あるいは社会学など、人と社会、人の営みと生活の質などの相互の関係性を深く学ばせ、根拠に基づいた科学的な判断ができる教育を行っている。

- ・作業療法概論では前半の座学で作業療法の日本における活動の広がりやいくつかの活動現場の紹介を学び、後半は作業療法の定義や手段としての作業活動、生活と作業との関係を学び、さらに作業療法の専門性について個別にまとめ、その後、小グループでディスカッション形式にて発表する形式で行っている。ここでは、クラスメイトとのコミュニケーションが求められる。

- ・作業療法研究法では、各種作業療法関連授業を通して得た理論や知識そしてそこで抱いた課題や疑問を解明する方法について丁寧に基礎的事項を学ぶ。

- ・作業療法研究法演習では、自身で課題や疑問を解明する一連の手順を体験する。具体的には、テーマを絞り込み、先行研究を調べて新たな課題や疑問を抽出してテーマに就職を加える。この課題を解明するために、研究法で学んだ知識を活用して研究計画を立てる体験をする。

- ・義肢装具学では、身体障害作業療法が対象とする各疾患に適する装具についてその必要性と効果をわかりやすく伝え、義肢学および装具学の原理原則について紹介して、作業療法を用いた対象に対する作業療法実践効果を拡大できることを想起し、さらにこの取り組みを発展させる方法論についてディスカッションするなど多様の社会に適応するための資質を向上させることを目的とした授業とする。

(2) 学生本位で考え・仮想あるいは実体験を通じて、障害を抱えた人の支援を考える

作業療法評価方法を理解するためのアクティブラーニングの実施

本教育手法は、身体障害者の心身機能回復や作業遂行の支援に必要となる作業療法評価方法を理解するために、授業において仮想患者を提示して事例評価を行う取り組みである。学生はグループで中枢神経疾患 1 事例、整形外科疾患 1 事例を示し、必要と思われる評価項目を列挙、その項目の是非について議論する。さらに評価項目とその結果の原案を示し、事例の全体像を焦点化しまとめ発表する。

(3) 文献検索能力の向上を図る

臨床家としての作業療法士においても先行研究をもとに作業療法を展開しなければならない。高度専門職業人として、国内はもとより、世界の情勢を踏まえて、最新の作業療法の方法を選択するエビデンス・ベースド・作業療法を常に追求できるように教育する必要がある。

文献検索をしてその中から有効な情報を得るために必要となる、信頼性の高い書籍や文献を検索する能力を養わなければならない。作成者は、授業の中で、信頼性の高い文献を紹介し、批判的レビューをする方法を説明おり、このことによって、対象者支援における問題解決の際に、学生自らが文献から必要な情報を入手でき、対象者に実践できるようになると考える。

4. 学習成果

湘南医療大学は年 2 回、前期と後期に学生授業評価アンケートを実施しており、すべての授業担当科目について学生アンケートを実施している。以下に作成者が係る授業のアンケート結果を示す。

授業科目 ①作業療法研究法、②作業療法研究法演習、③身体障害作業療法学Ⅰ（総論・中枢神経系）、④作業療法総合講義、（臨床実習は学外の実習指導者が指導をするため除外、卒業研究も担当学生は少人数のため除外）

保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻

作成者の 4 科目における平均値は、すべて学部の平均より高い評価である。意欲、理解、自発、考え方コミュニケーション 4.5 以上あり、総合平均も 4.7 以上と基礎的授業構成は高い評価が得られた。この結果に満足することなく、さらに魅力があり理解しやすい講義内容の追求が必要である。

5. 改善のための努力

さらなる魅力ある授業に向けて、以下の点を工夫するため授業設計をする。

- 作業療法士に必要な知識技術であることの理解
それぞれの授業が臨床現場においてどのように活用されているかイメージできるように、具体例を含めて提示する。
- 授業の説明について本授業がカリキュラム・マップを用いて位置づけを説明し、授業の到達目標や授業内容を理解させた上で授業を実施する。
- 初回授業の説明では、コマごとの進捗についてイメージを提示する。
- 各授業の開始前に本講義の全体の中の位置づけ、進捗や疑問点を共有する時間を設ける。
- 授業に対する理解度を確認しながら進める。
小テストや口頭質問法により授業理解度の調査を行い、内容分析するとともに授業計画に反映する。
- 授業の難易度の確認
学生が苦手と意識する傾向の強い授業は、事前学習を導入する。

- 適切な授業進度

専攻の教員から受講生の理解度について情報共有を行い、状況に応じて適宜授業展開を変更する。

- 形成的評価の方法

授業理解度の確認として小テストやレポート課題を実施し、定期テストもその小テストやレポートが理解できていれば解ける出題形式をとる。この小テストや定期テストの出題方法も工夫する。

- 形成的評価の反映

小テストの振り返りに時間をかける。答え合わせだけでなく、間違えた内容について質疑応答やグループ討議の時間を設ける。

- 学習方法の確認

学生の学習方法や状況を確認する機会を設ける。必要に応じて、語彙力や質問理解力を問う問題を出題する。

6. 今後の目標

- 短期目標 1.具体的な教育成果の評価 2023 年 9 月から開始

授業評価アンケート以外に、授業内容に関する聞き取りアンケート調査、基礎科目及び臨床実習成績との比較分析を行う。教育成果を客観的に評価する。

- 短期目標 2.授業改善の実践とセルフモニタリングの実施 2023 年 6 月から開始

行動チェックリストを用いて授業改善について自己評価を行う。

- 短期目標 3.FD 研修会や教育研究会への参加 2023 年 6 月から開始

教育成果分析法や適切な教育方法の実践について、研修会に積極的に参加する。

- 短期目標 4.研究活動、社会貢献活動の継続 2023 年 6 月から引き続き継続

貢献活動等を通して得られた知識や技術を、教育活動に活かす。

- 長期目標 1.学生満足度と学習成果評価が得られる授業を実施

授業改善のための工夫や自己研鑽を続け、最新の知識や技術を教育に導入し、魅力ある授業を展開する。